

な、悲しいシベリア抑留は、日ソ友好条約を一方的に破り、六〇万人余の我々を含む在満日本人を、言語に絶する苦境に陥れたソ連の行為である。絶対に忘れることのできない、許すことはできない……こんな思いです。

モンゴルでは共產教育はなかった。しかし帰国した私を含む多くの者は、就職では、筋金入りと思われる泣いたこともあります。

戦争に泣いた母よ安らかに

私は昭和二十二年十一月、モンゴルのウランバートルから七年ぶりにやっと自分の家に帰って来た。

母は「お前生きていたのか、よう帰ったのう」と言った。そして「兄を見なかったか」と言った。私は母の言葉で当時四十二歳の兄も召集され、シベリアに抑留されたことを知ったのである。

私は応召するまで呉海軍工廠に勤めていた。母は私の朝食と弁当を朝三時半に起きて作ってくれた。私は応召の朝、「お母さん、明日から早く起きなくてもよいですね。長生きをしてください」と言った。この一

言が当時二十二歳の末っ子の私の小さな、母への孝行ではなかったらうか。

母は私が帰って三日目に意識不明となり、私と話す間もなく兄の帰国を待たず、間もなく帰らぬ人となった。寒い朝だった。お母さん、おやすみなさい。お母さん、私はお母さんより十年長生きをしています。

### ソ連製の小さなシューパー(外套)

東京都 植原 秀一

昭和十八年の冬、満州国興安南省西科前仁義一佛立開拓団吾妻部落に家族四人で入植した私は、昭和二十年の夏、三十八歳で現地召集となり、ノンジャン(嫩江)の有村隊に入隊した。

しかし、すぐにソ連軍の捕虜となり、シベリアで厳しい冬を二回も過ごす抑留生活を送り、昭和二十二年の春、「明優丸」で舞鶴へ帰還した。

ソ連製の小さいサイズのシューパーは、全てのもの

が凍りつく冬のシベリアで私の命を守ってくれた命の恩人であり、つらい体験を共に過ごした仲間とでも言うべき思い出の品である。今は記念館の展示品となっているシューバーを思い出すと、口ごろは忘れていた五十数年前の出来事が、ある場面はおぼろげに、ある場面は昨日のことのようにはっきりと思い出される。

生まれつき小柄な私は、二十歳の兵隊検査で背丈を計ると、すぐに「もう帰ってよい」と追い返され、『第二国民兵』に編入され兵役を免除されたのに、現地召集では甲種合格で二等兵として入隊した。一方、同じ開拓団で現地召集を逃れようと策を巡らし入隊を遅らせた人々は、ハイラルでソ連軍と戦い全滅、また私より前に召集された人々は南方に送られ現地に着かずして全滅とか、そして開拓団に残った家族がたどった運命を思うと、自分の意思とは関係なく生きる方へ、生きる方へと選択したとしか言いようがない入隊だった。

有村隊は物資運搬が任務だったが、戦況悪化で運ぶべき物資もなく、ソ連軍に包囲されたあの日も、数人

で朝から武器も持たずにジャガイモの収穫作業に出掛けていた。昼過ぎに戻ってくると兵舎は、突然現れた十数台のソ連軍戦車に囲まれ、成す術もなく兵舎もろとも捕虜となっており、戻るに戻れない状況だった。

このまま逃走しても、日本人に恨みを持っている満人に必ず襲撃されるだろうし、ソ連軍に降伏してもその場で撃ち殺されるかもしれない。結局、夜を待って戦車の間を腹ばいで進み、塹を乗り越え兵舎に戻ったが、捕虜になるために命がけで帰還したようなものだった。しかし、他に生き延びる方法がなかったようにも思える。ノンジャンを出発するときの軍部の発表は、満州は危険だから黒河を渡ってシベリアを経て日本に帰るといふもので、まだ終戦を知らされていない私たちはその発表を鵜呑みにし喜んで出発した。

一日二日と露宮が続き疲れも極限に達していたが、一刻も早く日本に帰りたい一心で歩き続けた。黒河に着いて、皆の荷物を運んでくれた一頭の馬を、もう役済みとばかりに殺して血を抜き食べたが、何ともかわいそうで食べる気がしなかった。ここで二日ばかり過

ごし、いよいよソ連領へ入ったが、そこで待っていたのは、日本への帰国ではなく捕虜としての抑留生活だった。

今もどこの収容所だったのかよくわからないが、どこも馬小屋を改造したような粗末な所ばかりだった。初めての冬、主に白樺の伐採作業をやらされたが、気温が零下四〇度以下になると作業は待機となり、気温が少しでも上昇すると雪で真っ白な山へ出発し、ノルマを果たすまで二人一組で伐採と切断、そして運び出しの作業が続いた。何しろ凍りつく厳しい寒さの中、ちよつと作業してはすぐに焚き火を囲むことになるが、日本軍から支給された布製の外套は、焚き火の火の粉で焦げてしまうような物で、とても厳寒に耐えるような代物ではなかった。

外套は単なる防寒着ではなく作業衣でもあったが、小柄な私は、支給された外套が大き過ぎて作業中もずるずる引きずり、とても作業に適したものではなかった。どのようにして大き過ぎた外套が交換できたのか、今でははっきり覚えていないが、幸運にもソ連製の小

さいサイズの毛皮でできているシューパーが手に入り、とても大助かりだった。

そのとき、「これはソ連製なので、何かあったらすぐに返すように」と言われたが、ついに取り返しに来ることはなかった。

## 強制抑留の思い出

神奈川県 加藤 勇

繰上げ徴兵により昭和十九年十二月、満州新京の通信部隊に入隊。六カ月の厳しい初年兵生活を終え、延吉の通信部隊に上等兵候補教育のため転属になった。当時の戦況は、連合国側の攻勢で各地に苦戦が続き、その戦線はいよいよ本土に近づきつつあった。しかし、我々兵隊にはそんなことは知る由もなく、ひたすら軍務に励んでいた。

新兵が大勢入隊してきた。皆、我々より年長である。在満者に対する根こそぎ動員により召集された人たち